



YMCA 地域住民サービスセンター保育所

愛知県 溢愛館 金井牧仁

私たちの視察研修の最後の施設として、モントリオール市の市街地にあるYMCAの民間保育所を訪問した。

ビルの立ち並ぶ一角にあり、都会のスポーツセンターのようなYMCAの建物の中に保育所はあった。1階の玄関の横にはカフェがあり、反対側にはスポーツセンターに通う人たちの受付や事務所があり、その上にはトレーニングルームがあり、ホテルのロビーのような吹き抜けを望むつくりになっていた。そしてその奥に、まったく公的補助を受けていない保育所があった。私たちは4階に行き、YMCAのモントリオール本部と保育所と幼稚園の入り口の前で施設についての説明を聞き見学をすることができた。

保育所は、公的補助を受けているサービスと受けていないサービスがあり、補助を受けているサービスは一日\$7であるのに比べ、補助を受けてないサービスは4倍強の\$30の費用が個人負担として必要だとのことであった。

ここでの保育はカリキュラムが設定されており、日本でいう幼稚園のような印象を強く受けた。午前と午後の保育内容はほぼパターン化されており、子どもたちの自主性を重んじていると説明を受けたが、どちらかというスタッフの意志が強く反映されているように思われた。設備は保育施設自体のものとしては日本と比べ劣っているような印象を受けたが、YMCAの設備（屋内プールや体育館）を活用し、補っているようであった。

基本的な保育時間は、9時から17時であり、早朝保育と延長保育を一時間ずつ別料金で受けているようであった。説明された施設長の方は、自分の施設がいかに多くの子どもの課題に答えているかを強調されていた。しかし、私にはカナダで視察した他の施設（老人、障害、児童の保育所）と比べあまり魅力を感じることはできなかった。



屋上にある園庭

また、周辺大学の協力を得て学生が子どもたちのサポートをしたり、新しいプログラムに取り組んだりすることで、保育所に対する評価は高いらしく、高額な保育料を支払わなければいけないにもかかわらず、待機児童を数十人抱えているとの話であった。ただ、手渡された資料もなく、立ったままで説明を受けたので、振り返りをするのも困難なほど、疲れた視察であった。

今回の研修では、一貫してカナダの福祉施設における人権意識の高さや相互扶助のあり方（ボランティアで施設にかかわる人の多さ）、社会保障制度の手厚さなどを感じていた。しかし、このYMCAのように視点が利用者よりその周りの人びと（親や家族）に向けられると、今のあるがままの利用者自身を扶助するとの観点を持つ「福祉」と違う分野、つまり、利用者の意識を変容しようとする「教育」へ変化してしまう可能性があると感じた視察であった。

最後に、今回の海外研修セミナー2007（カナダ）の全般を通して私が感じたことをまとめて書くと、

まずカナダの福祉施策が、日本よりも老人人口比が少ないにもかかわらず費用負担の少ない在宅介護を中心に進んでいる老人福祉、自立した生活を目指すために行われている障害者の福祉、労働力の確保のためにそれまで家族に任されていた子どもの保育を考え始めた児童福祉、などの福祉の現状が、現在変化しつつある日本の新たな福祉制度とあまりにも似ていると感じたことである。

次に、カナダが多民族国家であるがゆえに各々の民族における文化的背景の違いにより、個人を優先させたり家族を優先させたりし、利用者の援助方法を変えていることを通し、各々の民族のアイデンティティを大切に扱っていると感じたことである。

さらには、民族性の違いと個人の尊重を両立させるために人権意識を高く保つことが必要になり、他者（他民族）を認める教育を幼いときから実践して

いると感じたことである。

そして、このようなカナダの福祉施策が、移民世代と次世代との間に世代間ギャップを生み、民族のアイデンティティを崩壊させるという新たな問題を発生させ悩んでいるようにも感じられた。しかしながら、このような問題を抱えつつも、カナダの福祉関係者が研修中に語られた「(福祉は) 統合 (インテグレーション) から包括 (インクルージョン) へと変化している」との発言や「自分で守れない自由ほどもろいものはない。それ (守られない自由) を守るのが私たちの使命である」との発言があり、前述のような新たな問題に対しても前向きに取り組んでいこうとする思いが感じられた。そして、これらの言葉と姿勢こそが、変わりつつある私たち日本の福祉施設関係者が持つべき新たな指針ではないかと思われた。